

# Parīkṣāmukhasūtra における svavyavasāya について

安 藤 嘉 則

(I) ジャイナ数の認識論・論理学は空衣派の Akalaṅka によって大きな飛躍をとげ、彼以降のジャイナ思想家達は、Akalaṅka によって大きく方向づけられた学説を一層整備し、体系化していく役割を荷っていた、ということが出来るであろう。就中、空衣派で Akalaṅka の後継者であった Māṅikyanandin は *Parīkṣāmukhasūtra* (PKM) を著し、Akalaṅka の認識論・論理学を簡潔にまとめ上げた。空衣派に限らずジャイナの網要書類は大体においてこの PMS を踏襲しているようである<sup>1)</sup>。本稿では特にこの PMS 第一章を主な材料とし、そこに述べられているジャイナの自己認識説について検討してみたい。尚、必要に応じて Prabhācandra の PMS の註釈書 *Prameyakamalamātaṇḍa* (PKM) を参照する。

(II) この PMS に述べられる自己認識説を検討する前に、冒頭の k. 1 について触れておこう。このスートラは認識根拠 (pramāṇa) としての知 (jñāna) のあり方が要約されており、この第一章の中心テーマともなっている。

認識手段とは [知] 自身と未だ捉えられていない外境とを決知するのを本性とする知である。(k. 1)

つまり認識手段である知識 (jñāna) は、外的世界に存在する対象、及び内的世界としての自己をその認識対象として作用すると説明され、このうち後者の場合が自己認識にあてはまるのである。このような考え方は、Siddhasena Divākara 以来のジャイナの基本的立場である<sup>2)</sup>。

またこのスートラでは、知の認識作用・照明作用が決知作用 (vyavasāya) として示されていることが注意されよう。ジャイナ認識論では、対象認識・自己認識のいずれの場合においても、知はそれが認識根拠である限り、決知作用が含まねばならない。つまり、判断を伴わない無分別の知 (即ち未決定知) には認識根拠としての意義を認めておらず、これ故に彼らが有分別知覚 (savikalpapratyākṣa) 説に立脚していると考えられるのである。

PMS 第一章は、この冒頭のスートラを受けて、認識根拠としての知の作用の

うち、まず対象決知 (arthavyavasāya) について kk. 2-5 において説明し、引き続き kk. 6-12 では自己の決知 (svavyavasāya) 即ち自己認識について解説する。

(Ⅲ) さて、そこで、k. 6 以降の svavyavasāya について検討していきたい。

自己を決知するというのは、〔知〕自身に向けて照明することである。(k. 6)

〔知が外的〕対象に対して〔照明するのと〕同様に、〔知は〕それ〔自身〕に向けても〔照明する〕。(k. 7)

k. 6 は、冒頭の k. 1 の部分的説明となっており、知自身に対する決知作用が、自己に向けて発する照明作用として説明されている。k. 7 では、自己に対するこの照明作用が、kk. 2-5 に前述された外境認識と同一の照明作用であって、照明の方向が転じられたに過ぎないことが述べられている。

私が自身によって瓶を知る。(k. 8)

なぜなら対象と同様、認識主体・認識手段・認識作用も知覚されるから。(k. 9)

ジャイナにとって、認識現象はまさに k. 8 の如く説明されるが、より分析的に説明するならば、認識主体 (kartṛ) である自我が認識手段 (karaṇa) である知によって対象 (karma) に対して認識作用 (kriyā) を及ぼすことである。従って瓶等の対象が知覚されるのと同様に、これら認識主体 (自我)・認識手段 (知)・認識作用もそれぞれ知覚されうる、と k. 9 において示されているのであり<sup>3)</sup>、これが自己に対する決知 (svavyavasāya) を説明したものである。

かようなジャイナの学説は、自己認識を承認する諸学派の中にあって、その独自性を伺わせるものであろう。今ここで代表的有形象論者である経量部によって主張された自己認識説と比較しながら検討してみよう。

経量部における自己認識とは、青等の対象相が知に顕現していることに他ならないが、これを知の内部構造において論理的に説明するならば、知に顕れている青等の表象 (所取相 grāhyakāra) を能取相 (grāhakākāra) としての知が捉えることであった。

一方ジャイナ認識論では、仏教の立場と異なり、認識主体を立て、これが知を認識手段として外界に実在する対象に働きかける、という構造において svavyavasāya が立論されてた。つまり svavyavasāya には、知が知自体を認識する、という自己認識のあり方の他に、認識主体の知覚をも含む広義の自己認識の形が認められるのである。経量部にとって自我の知覚を自己認識として認めることはあり得ないのであり、まさにこの点において、ジャイナの説く svavyavasāya は、自己認識をあくまで知の内部構造において捉える経量部説と大きく内容を異にす

るのである。

(IV) Prabhācandra は PKM において、この kk. 8-9 を注釈する際、Mīmāṃsā 派の自己認識説批判を前主張として纏め、これを批判する形で両ストラを位置づけている。

#### 〈Mīmāṃsā 派の前主張〉

〔反論して〕述べる。知が知覚されるならば、知は外境の如く対象として (karmatvena) [知覚される] ので、手段を本性とする別の知が想定されるであろう。それ (別の知) もまた知覚される場合、前と同様に対象として [知覚される] から、〔さらに〕別の、手段を本性とする知が認められねばならず、無限遡及となるであろう。〔然らば〕それ (知) が知覚されなくても、最初的手段 [としての知] について、それがそのように [認識] 手段として認められないような不足があるだろうか。またまさに単一な知が相互に矛盾する、対象・手段という形象を認めることは正しくない。他のもの (瓶等) の場合、そのように知覚されないから。

#### 〈ジャイナからの反論〉

以上のような疑いに対して、認識対象と同様、認識主体・認識手段・認識作用の知覚が成立することも直接知覚であることを示して述べる。

〔ここで PMS kk. 7-8 が提示される。〕なぜなら、対象として [知覚される] ことが、直接知覚されることではないから。そうでなければ自我についても直接知覚されず、それ (手段としての知) と同様、それ (自我) も知覚されなくなってしまふ。それ (対象) として知覚されなくても、認識主体として [自我] は知覚されるが、知が直接知覚される場合も、手段として知覚されるので直接知覚されるはずである。〔自己も知も対象として知覚されないが、直接知覚されるという点で〕区別はないから。もし手段として知られた知は〔あくまで〕手段であって直接知覚されない、というならば、もう一方の場合〔認識主体としての自我〕についても同様である<sup>4)</sup>。

前主張にみられるような Mīmāṃsā 派の自己認識説批判は、例えば Kumārila Bhaṭṭa の *Ślokovārttika* に跡付けることが出来る。(ŚV, Sūnyavāda, k. 184.5<sup>5)</sup>)

Mīmāṃsā 派によると、知は必ず何かを認識するための手段に過ぎず、知がそれ自身を認識し、確認することは出来ない。かように知を他立的なものと考察するが故に、彼らの認識論では、知が知自身を認識することは、必然的に無限遡及とならざるを得ないのである。これは、彼らが知の認識作用を具体的には非精神的な感官の働きとして捉えていることに依るのである。つまり視覚器官が視覚器官を視ることが出来ないように、知の自己認識は彼らにとって認め難いのである。

一方、ジャイナ認識論においても感官は重要な役割を果たしている。即ち彼ら

も知の認識作用が実質的には感官の働きとして捉えている。しかしながら彼らは Mimāṃsā 学派のように、感官を非精神的な器官として考えていた訳ではない。Āgama や *Tattvārthādhigamasūtra* 等<sup>6)</sup> より受け継がれている彼らの伝統的認識論に依れば、感官は実体感官 (dravyedriya) と作用感官 (bhāvendriya) に二分されている。前者は物質的な感官器官そのものを指しているが、後者は認識能力の獲得 (labdhi) とその能力を適用した認識作用 (upayoga) という二種の精神的な活動を荷うものである。そしてこの作用感官というものが、ジャイナの自己認識説を説明する上でかかわってくるのである。

Prabhācandra 等のジャイナの学者達<sup>7)</sup> によると、この作用感官のうち、「獲得 (labdhi)」とは「自身と対象とを認識する能力 (svārthagrahaṇaśakti) を特相とする」のであり、また「適用 (upayoga)」とは「自身と対象とを認識する作用 (svārthagrahaṇavyāpāra) を特相とする」と位置づけられている。つまり対象認識の場合と同様、labdhi は自己を認識する能力、また upayoga も自己を認識する作用をそれぞれ特相とすることになり、ジャイナの自己認識説を成り立たしめている重要な役割が作用感官に与えられていたのである。

以上、PMS とその註釈を資料としてジャイナの自己認識説を検討した。

- 1) 伊藤篤「Parikṣāmukhasūtra における Pramāṇa の分類」『印仏研』25-2 参照。殊に白衣派の Devasūri の *Pramāṇanayaatattvālokaḥkārā* は PMS を受け継いでいる。
- 2) 'pramāṇaṃ svaparābhāsi jñānaṃ, bādhavivarjitaṃ' *Nyāyāvātāra* k. 1 ab.
- 3) cf. Parikṣāmukha-Laughuṣṭi of Anantavīrya, (B. I. 版), p. 11, ll. 5-7.
- 4) PKM, p. 121, ll. 4-17. cf. *Nyāyakumudacandra*, p. 175. ll. 1 ff, p. 176, ll. 11 ff, *Syādvādaratnākara*, p. 212, ll. 20 ff, *Tattvārthāślokaḥvārttika*, p. 46.
- 5) この偈は *Tattvasaṃgraha*, k. 2012 として引用され、仏教の立場より論難されている。また Mimāṃsā の考える知が知自身を認識するとき、無限遡及となることについて、*Tattvasaṃgraha* でも同様な論述が見られ、Mimāṃsā 派の認識論批判が行われている。(kk.2022-2024)
- 6) *Pañṇavanāsūtra* (Jaina Āgama Series 9 Pt. 1) pp. 252 ff. *TAS* II, 16-19.
- 7) PKM, p. 122, ll. 4 ff. *Syādvādaratnākara*, p. 214, ll. 3-6. Vidyānandin の *Tattvārthāślokaḥvārttika* (p. 327) では svārthasaṃvidyogyatā と svārthasaṃvidyāpṛatva.

(東北大学大学院)